

醜との心理臨床

東 畑 開 人

1. Breuer,J.とAnna O.の物語

心理臨床とは生身の人間関係の場であるゆえに、根源的な人間性が顕わになる場である。そしてときに、その根源的な人間性は面接の場において醜というありようにおいて実現される。他者との十全な出会いを志向するときに、醜が避けがたく二人の関係に訪れる。その人間性の影とはクライアントに属するものでもあり、同時に心理臨床家に属するものでもあるゆえに、醜の実現はしばしば関係を破綻させるように機能する。そう、Breuer,J.とAnna O.のように。

精神分析の産声として知られる『ヒステリー研究』に掲載されたAnna O.の事例はあまりにも有名であるが、その舞台裏での壮絶な人間関係を後年Freud,S.がJones,E.に語っている。

Breuer,J.がAnna O.に今ならば逆転移といわれるような感情を抱き、毎日のように数時間の往診を重ねた。それは彼の妻に嫉妬を抱かせるのに十分で、「彼の中に愛と罪の意識の入り混じった激しい反応」を引き起こした。そして彼は治療をやめる決心をして、彼女に別れを告げる。その夜、Anna O.に呼び出されたBreuer,J.は、彼女がヒステリー性の出産陣痛にあることを目撃する。Breuer,J.はそのことに深い衝撃を受け、自宅に逃げ戻り、そしてそのまま妻と第二の新婚旅行としてイタリアへと出発する。それが治療の終わりであった(Jones,E.(1957/1969)より要約)。

面接の場に、心理臨床家とクライアントの生々しい欲望と感情が充満し、それが面接そのものを破壊してしまうことは、現代の心理臨床においても珍しいことではない。このシーンでは、Breuer,J.が身勝手に関係を放棄したように一見されるが、関係にあって起こることは相互の影響の結晶であり、そこでは関係のほうに主体が委ねられていることを理解するとき(Ogden, 1997/2006)、Breuer,J.を責めることは出来ないだろう。むしろそのような関係が欲望の膨張による必然的な結果であることから、Breuer,J.とAnna O.の物語とは、我々の心理臨床にもまた布置される現代的なテーマであると考えられる。しかし、関係の学の始原である精神分析以前を生きたBreuer,J.とは異なり、現代の心理臨床家は関係の学こそを専門性とするゆえに、Breuer,J.とAnna O.の物語が終わった地点からさらに一步踏み出していかなばならない。

本論では、この関係が決壊する地点で起こったことを醜という観点から検討することが目的となる。Breuer,J.がヒステリー性の陣痛を目撃したときの「深い衝撃」と、イタリア旅行へと至った心の動きを理解する上で、醜を無視することは出来ないと筆者は考えている。主体と他者の欲

望の充満とその顕現は、エゴイスティックな生身の人間性が顕わになる契機であり、醜の温床であるからである。本論が主題とするのはこのような心理臨床における醜の実現である。心理臨床において醜が実現する際に、その面接関係はいかなる事態にあるのかを明らかにし、そのとき心理臨床家のいかなるありようが、心理臨床という関係を生きる営みを支えるのかを検討したい。この問いが意味しているのは、醜の美学ではなく、心理臨床における醜の倫理学の探求である。

2. 基本的な立場

醜に関する研究を積み重ねてきたのが美学の領域であったことは言うまでもない(Rosenkranz, 1853/2007 佐野,1994)。本論でもそのような知見は参考にされるが、心理臨床学の文脈にある本論は美学的な研究ではありえない。本論の妥当性は心理臨床の実感に求められる必要がある。しかし、心理臨床学分野ではほとんど、醜を主題にした研究がなされてこなかった (Hagman,2005)。このとき、本論で醜という現象をいかなる立場において理解しているのかを明確にしておくことが必要だと考えられる。なぜなら、醜についての通俗的な理解とは、心理臨床において暴力として機能しうるものであるからである。

河合(1991)は心理臨床家にとっての「現実」を、醜形恐怖のクライアントを例にとって論じているが、それは心理臨床における醜の理解の基本的な前提を示唆するものである。すなわち、クライアントが訴える顔の醜が心理臨床家にとっていかに非合理的なものであったとしても、心理臨床家はクライアントが醜を感じている事実を受け容れていく必要があることが強調されている。このときに、醜は万人に共有される客観的な事実としてではなく、個人個人の主観的な事実として捉えられていることがわかる。すなわち、心理臨床における醜には個人の主観において実現されるという個性が前提とされている。それは、客観的な美醜というものが存在しているというような通俗的な理解とは対照的である。「わたしの顔は醜い」という言明には、顔そのものに醜という客観的な属性が備わっているというニュアンスが込められているが、心理臨床の実際においては「私にとっては私の顔は醜く感じられる」というニュアンスとして理解される。ここで本論は、主観ということ、醜の個性性に焦点をおいて強調したのだが、心理臨床における醜とは、それが個別主観に実現されると同時に、対象との関係に根ざして実現されるのもまた事実である。すなわちBreuer,J.とAnna O.がそうであったように、主体が感じる醜は、対象との欲望のやりとりを通して、対象との間で成立してくる関係性に導かれるようにして、実現されてくるものである。この意味で、醜とは客観的な「実体」として存在するのではなく、間主観的な「体験」として実現されるものだと考えるのが本論の立場である。

以上のような前提が必要とされるのは、心理臨床における醜の倫理学という本論の問いの性質と深く関係している。なぜなら、後述するように、醜を実体として理解すること自体が、面接関係の破綻を引き起こす大きな誘因になるからである。

以上を踏まえた上で、次に本論が主題とする醜とは一体いかなる内実を持つのかについて示すこととする。すなわち、Breuer,J.とAnna O.の関係において実現された醜を、いかなる体験として本論で理解しているのかを、具体的な例に即して明らかにしたい。

3. グロ画像の現象学

醜という語は一般に「美の対立概念である(高橋,1971)」と定義されるので、「美ではないもの」という幅広い感性的な現象を記述する語である。例えばあまりに形式的な建築も醜であれば、クレヨンがはみ出した塗り絵も醜であり、カラスに食い荒らされたゴミの山もまた醜で、そして腐乱した膿が流れ出る傷跡も醜である。しかし、本論における醜とはもう少し限局された現象をイメージしている。

醜とは「醜い(みにくい)」＝「見難い(みにくい)」であるように、体験の形式として視覚性の否定という性質を帯びている。それは霧が立ち込めていて視界が悪く「見難い」という次元の視覚性の否定とは異なり、「ugly」が本来「fearful」や「horrible」の意を備えていたように(小島他,2007)、対象との出会いにおいて強く呼び起こされる不快感と不安による、目を背けざるを得ないという視覚性の否定である。

このような醜の意図的な仕掛けとして、ネットのグロ画像がある。グロ画像とはインターネット上にアップされた画像のことであり、しばしば掲示板などにリンクを貼られる。ユーザーは例えば好きなアイドルの画像を紹介されたと思って、そのリンクを辿っていくと、そこでアイドルではなく、醜を実現させるグロ画像と出会うことになる。グロ画像の具体的なありようを追っていくことによって、本論で問題となる醜とはいかなる体験であるのかについて明らかにしたい。

何らかの理由で顔の下半分が挟り取られ肉と血が剥き出しになった人間であったり、皮膚が硬化し変質し樹木の節くれだった枝のようになった手であったり、重篤な奇形の子どもであったりの写真が、グロ画像としてネット上に現れる。そのような画像によって、主体はもはや当たり前の自然ではなくなった身体のありようを目撃する。このとき、多くの人が耐え難いほどの不快感や不安を感じる。この不快感や不安は、認知的なものである以上に、身体感覚において感じ取られるような原始性を帯びている。例えば、頭部がジュクジュクと膿んだ男の顔は、自分自身の当該部の皮膚に強い違和感を呼び起こす。そして不快感に耐え切れずにおもむろにウィンドウを閉じることになる。画像の前にとどまることが出来ずに、目を背けるということが起きる。しかし、目を背けてしまったゆえに、その画像はフラッシュバックのようにして何度も主体に訪れる。その度に、画像を見た瞬間の不快感が蘇ることになる。このような心的外傷と醜の実現の類似性は、醜という体験が暴力という問題と深く関わっていることを示唆するものである。

本節で取り上げたグロ画像は、身体の損傷と変形を主なテーマとしている。身体の損傷や変形は、事故などの外的な力、あるいは病気などの内的な力などの、身体にとっては異質な力(=暴力)が具現されたことを感じさせるものである。そのような異質な力はプリミティブなありようで主体の身体感覚にまで働きかける。醜の実現においては、そのようなプリミティブな力の働きが実感される。以上より明らかであるように、本論にとっての醜とは、主体と対象との出会いにおいて、目を背けざるを得ないような不安と不快感を引き起こすような醜である。それでは、そのような醜の実現に際して、主体は対象に対していかなる反応をなすのであろうか。Breuer,J.とAnna O.における関係の破綻が、Breuer,J.のいかなる心の動きの結果であったのか。

4. 暴力の発生—ハンセン病をめぐる

心理臨床において醜が実現されたときに、心理臨床家がクライアントに対していかなる反応を示すのかを問うために、本節ではハンセン病患者に対する共同体の反応を素材としたい。

ハンセン病とはらい菌の感染を受けた人の一部が発症する慢性の感染症である。症状として、末梢神経や皮膚が侵され、手足、顔などの人目につくところに病変が起こる。感染自体は薬物によって完治が可能であるにもかかわらず、運動障害や感覚障害、そして身体の変形という目立った後遺症が残ることがあることから、病気のことを詳しく知らない人には「病氣」が治っていないような印象を与えることがしばしばあった(蘭,2004)。菌の感染という意味での病氣が治癒したとしても、残された後遺症によって「病氣」が治っていないとの印象を与えたように、ハンセン病の問題は医学的な次元を超えた苦しみ の存在を提起する。

ハンセン病患者の苦しみには、らい菌による病変の痛みに加えて、周囲の人間関係や共同体の反応による苦しみ が大きな位置を占めている。苛烈な身体の変形というハンセン病の進行の結果は、先述したように醜の実現における中心的なテーマであり、共同体に一貫した反応を引き起こしてきた。それゆえに、共同体のハンセン病患者に対する反応を検討することは、醜についての主体の反応を理解する上で有効だと筆者は考えている。しかし、ハンセン病患者の辿った歴史を醜に対する反応の歴史であることとして論じることには、そのこと自体として暴力性が潜んでいることに留意する必要がある。それは本来関係に根ざしているはずの醜を、ハンセン病患者に備わった実体としての醜として理解する暴力性である。これは先述したグロ画像に関しても同様である。醜を論じることの暴力性については、本論の終わりに考察したい。ここでは、本論の記述の暴力性に留意しながら、ハンセン病患者に対する共同体の反応について検討したい。

ハンセン病という病名は1873年にらい菌をアルマウェル・ハンセンが発見したことにちなみ、それ以前にはハンセン病という病名は存在しない。しかし、人類の歴史と同じだけ古く、ハンセン病にあてはまる症状は存在している。聖書では皮膚や身体に変形をきたした人々がツァーラトとして記述されている。彼らは穢れた者とされ、共同体から排除されて、宿営の外の荒野で暮らさねばならなかった(滝澤,2001)。日本においても基本的な路線は変わらない。ハンセン病は「癩」と呼称され、長く差別の対象になってきた。中世においては「癩」者だと判断された者は、その外見から前世からの業病である「天刑病」とされ、共同体から引き離され非人身分とされた(丹生谷 2001)。近代に至って、各地にいた「癩」者は長島愛生園などの収容所に隔離されることになった。そのような隔離は法律的にも規定された、国家ぐるみのシステムであった。

以上より、ハンセン病患者に対する共同体の反応が差別によって彩られてきたことがわかる。その差別とは、共同体の正当な一員としての資格を剥奪され、その周縁のほうへと追いやられてきた歴史であり、近代になってからは隔離へと至った歴史である。醜が実現するときに、共同体はそれを「見難い」ものと感じるゆえに、目を背けようと試み、自らの日常的な世界から排除しようと試みる。それはハンセン病患者の人間性の否定を意味し、関係を持つことの拒絶を意味している。イエス・キリストがツァーラトと共に食事をし、その身体に触れたことが、ゴルゴダの丘を準備するほどにラディカルな意味を含んでいたのは、その行為がツァーラトの人間性の否定と彼らとの関係の断絶という当時の共同体の価値体系を根本的に転倒させるものであったからである。

以上から明らかであるが、醜の実現に際して、主体は他者の人間性を否定し、関係の断絶を試みる。関係の断絶とはそれ自体で暴力としての要件を備えている。すなわち、レイプや虐待などの他者にモノ化される体験(Herman,1992/1997)が人間同士の関係を断絶するという暴力性に特徴づけられるように、醜の実現における関係の断絶もまた暴力であると、筆者は考えている。そ

れは、腕力を行使するという明らかな暴力ではなく、「目を背ける」というありかたでのひそやかな暴力である。そして、心理臨床において無意識のうちに心理臨床家がひそやかな暴力を行使することは稀ではない。Breuer, J.のように極端な形ではなくても、毎回毎回の面接において、気づかないうちに、どこかでそのようなひそやかな暴力が発動する。受容し共感するという心理臨床家の職業的規範とは裏腹に、生身の人間関係の中では暴力はひそやかな形で確かに存在している。

醜の実現において、主体は関係の断絶というひそやかな暴力をなすことを述べた。ここまで醜の実現をそれがいかなる体験であるのかという外側から記述してきたのだが、次にその内面へと進みたい。すなわち、醜がいかなる主体の心的プロセスにおいて実現されるのかという、醜のメカニズムの検討を行うことで、心理臨床における醜の実現とはいかなる事態であるのかを明らかにしたい。そしてそのことによって、ここまで論じてきた醜の体験を分化させて、心理臨床の場で起こる否定性を明確にしたい。

5. 「かたち」の否定

Rosenkranz(1853/2007)は醜についての網羅的な百科事典にして理論書である「醜の美学」において、「美の必然性は美自体によって規定される(中略)だが醜は醜そのものによって測ることは出来ず、美によってしか測れない」と述べ、醜を「美の否定」と定義している。すなわち、美はそれ自体として独立した現象であるが、醜は美を前提として、美との相対においてのみ実現される現象とされている。そして、醜のカテゴリーとして「形の定まらないもの」「不正確」「歪曲もしくはゆがみ」という「かたち」の逸脱を挙げている。それゆえ、醜の前提である美とは「かたち」のことであり、換言すれば醜は「かたち」の否定と考えられている。実際、「醜形恐怖 Dismorphophobia」において、「morpho」が「かたち」を意味し、それに「dys」という否定の意が付されており、醜が古語において「かたなし」という「かた(ち)」の「なし=否定」として表現されているように、醜とは「かたち」を前提として、そこから逸脱し、否定されたときに実現される現象である。このとき、醜がそれ自体の「かたち」を持たないことは重要である。すなわち、「醜い」であれ、「グロテスク」であれ、いかなる形容詞を付されようと、「かたち」として存在する限りには、そこでは醜は実現しえない。例えば「醜いかたち」はそれが「かたち」であるゆえに醜ではありえない。同時に、「かたち」以前の混沌においても醜は実現されえない。醜における「かたち」の否定とは、本質的な意味での否定の機能である。それゆえ、まずは前提される「かたち」が存在し、それからその「かたち」が否定されるという順序を経なければならない。

本論では身体の変形と皮膚の損傷を主な素材として検討を重ねてきたが、これらの素材が醜を検討する上で必然性を持ったのは、それが「かたち」の否定という契機を備えたものであるからである。特に皮膚とは身体を象り、内外を区別することで輪郭を構成するものであるゆえに、「かたち」にとっては本質的な要因である。すなわち、皮膚とは「かたち」を構成するゆえに、美の舞台であり、それが破れるときに血と肉が滲むように、醜が実現される戦場となる。Freud(1930 /1969)は女性器が美ではありえないことを述べているが、これは女性器が、全身を覆う皮膚が破れて、体内を覗かせる場所に粘膜として存在していることによるのではないか。

以上より、醜が実現するとは、「かたち」の否定であることを確認したが、それでは「かたち」とは一体いかなる現象であるのだろうか。このことを明らかにすることで、醜のメカニズムを理解することが可能になると考えられる。このときに重要な論点は二つである。一つは「かたち」の力学であり、もう一つは「かたち」の常態としての生成の問題である。

6. インクブロットとキリンの力学

「かたち」とは外的な形態と内的な認識の双方にまたがる現象であり、その中間に位置する現象である。すなわち、モノと生物が存在する基盤であると同時に、主体が世界を認識する上での不可欠な参照枠であるのが「かたち」であり、両者は相補的に絡まりあっている。それゆえに、「かたち」という主題は、物理学や生物学などの外的存在物の研究と、哲学・美学・心理学という内的な主体の認識機能の研究とが交差する学際的な領域に存在する(Whyte,1951/1985)。その中間性ゆえに、「かたち」を論じるときには、外的な形態の性質と内的な認識の性質がパラレルになっていることに注意を払う必要がある。

「かたち」の問題を論ずる上で興味深い現象を提供してくれるのが、ロールシャッハテスト(以下、ロ・テストと省略)である。このテストはその仕掛けとして、外的な「かたち」であるインクブロットと内的な「かたち」である反応(たとえば「コウモリ」)の中間における「かたち」のブレを備えている。そのことによって、「知覚における積極的な構成過程が、日常の一般的な知覚におけるよりも活発(Schchatel,1966/1975)」になり、通常反省的な主題とはなり難い「かたち」の機能や性質を意識的に把握することが可能になる。

インクブロットとは偶然に出来たインクのしみであり、それがなんらかの「かたち」を意味しているわけではない、というのがロ・テストにとっての第1前提である。しかし、それはあくまで策定された前提に過ぎず、精神病の水準にまで退行した被検査者によって見抜かれるように、実際はインクブロットには「かたち」が備わっている。この「かたち」がいかにして成立するかを問うことによって、「かたち」の本性がいかなるものであるのかを検討したい。片口(1987)はインクブロットの成立を以下のように記している。

白い紙の上に、2, 3滴のインクを落とし、それを二つに折ってから開いてみると、奇妙なシンメトリーの図形ができてあがっている(中略)指先の細工で、インクを散らして図形に変化を与えることはできても、意図した通りの形を作ることは全く不可能である。その意味で、このようにして作られたものは偶然にできあがった図形と呼んでよからう。

それは人為を排するという意味では「偶然」であるが、実際にはそれが力学的な法則に従った結果であるという意味では「必然」の様相を帯びている。高木(1997)が流体力学の立場から「かたち」の成立を論じているように、「かたち」は諸力の均衡の上において成立する。インクの浸透性と紙の抵抗、重力、空気圧、気温そしてインクを落とした人間の息遣いや心拍数など、無限の要因の中で力学的均衡が成立する地点において「かたち」が結実してくる。多様な諸力が均衡する一点を目指して「かたち」として結実してくることからは、インクブロットが十全に調和を保った力の凝集体であることが理解される。それはインクブロットのような無機物に限らず、生

命体においてもまた同様である。むしろ、生命体においては、それ自身の内部に環境に適応しようとする力を動因として備えているゆえに、力の調和体としての性質は顕著である。その端的な例として、高い木の葉っぱを食べたいという生命の力の方向と重力との奇跡的な力学的な調和体であるキリンの首をあげることができるだろう。それは極めて危ういバランスにおいて、しかし安定性を持って調和している。

以上より明らかであるように、「かたち」とは力学的調和体である。このとき、醜の実現、すなわち「かたち」の否定とは、力学的調和体の破れであることが理解される。「かたち」が破れるときには、そこから本来調和していたはずの力が無秩序に奔流しはじめることになる。そのような力の無秩序な奔流は主体の認識の次元では、きわめて不快な体験として実感される。秩序を志向するという知覚の本性上、無秩序は知覚する主体にとっては不快感を引き起こすものとなるからである。力士の「四股名」が本来「醜名」であったように、醜を表す古語の「しこ」には「怪異な力」という意がある(白川,1999)。先述した醜の実現における耐え難い不快感とは、「かたち」の否定によって奔流しだす無秩序な力の体験に根ざしていると考えられる。このことは、インクブロットに適切な「かたち」を見出すことができない被検査者にとって、ロ・テストが心的に侵襲性の高いテストとして体験されることから示唆されるだろう。

「かたち」の否定とは、力学的調和体の破れであることを論じたが、「かたち」とは破れたまま固定化されるものではない。むしろ、「かたち」にとって重要なのは、それが常態として生成しゆく運動にあるということである。それは醜の実現を理解する上で、奥行きをもたらすものである。

7. モルフェーと「見つめ」

「かたち」の生成しゆく側面を問題にしたのはGeotheであり、彼の形態学(Morphologie)は固定化した形態を問題にしたゲシュタルトの学ではなく、常に形成しゆく運動を問題にしたモルフェーの学であった。モルフェーとはそもそもギリシアの夢の神の名であり、モルヒネと語幹を共有しているように、「薄暗く定かならぬところから立ち現れる姿・形、表層的ではなく深層的な、静的ではなく動的な姿・形(中村,1991)」である。完成された「かたち」としてのゲシュタルトに比べて、モルフェーという語には様々に変容し、常態として生成しゆく運動をなす「かたち」というニュアンスが強くこめられている。それはさながら生命現象のように、である。

皮膚が傷口を被い瘡蓋を作るように、「かたち」とは否定された上で、再び「かたち」になろうとする運動を内包している。それは外的な「かたち」自体に備わる運動であると同時に、主体に備わった運動である。インクブロットを眺める中で、「コウモリ」が「チョウ」に変わり、そして「黒い天使」へと変容を遂げていくように、主体には「かたち」を生成していく運動が備わっている。Schachtel(1966/1975)は形態反応について、「かたち」の生成には、主体の能動的な「見つめ」が必要となることを述べている。「強い光や色彩によって受動的に衝撃を受けるのではなく」、「能動的な焦点付け、構造化、注意を必要とする」ことによって、「かたち」が生成されてくる。木村(1992)が「生きたかたちの認識は認識主体の(中略)生命的行為によって可能」になることを述べているように、生成しゆく「かたち」には、生きた主体による「見つめ」というコミットが必要となる。この意味で、モルフェーとは主体と客体が分かたれた自然科学的な事態ではな

く、主体と主体が対峙するような間主体的な事態における「かたち」の本性であると考えられる。

それゆえに、「かたち」の否定とはそれ自体において決して固定化し、実体化した事態ではない。主体の「見つめ」の中で、否定された「かたち」は、再び「かたち」へと生成しゆく。その好例がファッションである。鷺田(2005)が「変形の学生服というのがたぶん最初のファッションであるはず」と述べるように、ファッションとは否定された「かたち」が再び生成された「かたち」である。学生服からシャツがはみ出るときに、「かたち」が否定され、見苦しさが喚起されるのだが、それは再びオシャレな「かたち」として再生しゆく。重要なことは見苦しきの回復はシャツがズボンの中に収まるという以前の「かたち」への回帰によってなされるのではなく、はみ出たシャツ自体が「かたち」として成立するという点である。ここに美と醜の弁証法的な関係がある。

「かたち」の生成とそこで果たす「見つめ」の機能を理解するときに、「目を背ける」という行為が醜にとって本質的な契機になることが理解される。すなわち、ハンセン病者にとっての隔離に端的に示されるように、醜の実現による耐えがたい不快感によって、主体は「かたち」から目を背ける。このことが意味しているのは「見つめ」の断念であり、そのことによって「かたち」の再生は放棄される。この段階に至って、醜は実体化される。すなわち、耐え難い不快感は、体験の側から対象の性質として転移されていくことになる。

筆者の醜についての理解を要約したい。それは二つの契機から成立する。一つは「かたち」という力学的調和体の否定によって流れ出す、力の無秩序な奔流による耐えがたい不快感と不安の体験である。もう一つは不快感に対する反応としての「目を背ける」という行為によって、「見つめ」が断念された結果としての醜の実体化である。この段階に至って、醜はもはや動かしようのない事実となる。人はその醜さゆえに対象を遠ざけると同時に、遠ざけることによって対象を醜くするのである。その意味で、醜とは美学的な事態(第1の契機)であると同時に、行為が問題となるような倫理的な事態(第2の契機)である。

8. アブジェクションと「醜」

醜の実現が二段階に分けられることを論じた。それゆえに、今まで醜という言葉で論じてきた体験が二種類に分けられることが示唆される。その二種類の醜とは、Kristeva(1980/1984)の記述した「アブジェクション」と狭義の意味でのカッコつきの「醜」である。

「アブジェクション」とは、「おぞましさ」を表す概念であり、特に恐怖症と境界例のクライエントとの臨床経験から導き出されたものである。Kristevaはこう記述している。

ある食物、汚物、屑、塵芥に対する嫌悪感。私の身を守る痙攣や嘔吐。汚穢、掃きだめ、不浄から私を引き離し、身を背けさせる反感や吐き気。妥協、どっちつかず、裏切りの醜悪さ。これらのものへ私を導いてゆくとともに、切り離しもする、魅入られたような不意の動作(Kristeva, 1980/1984)

上述されているのが、本論が醜という言葉で執拗に追ってきたグロ画像などの体験であることが理解される。実際、「アブジェクション」は死体において、特徴的に顕現される。それは主体

の耐えがたい不快感を内容としている。この意味で、「かたち」の否定による耐えがたい不快感の段階とは、「アブジェクション」の段階である。そして、そこから「目を背ける」段階において成立するのが「醜」である。すなわち、体験から対象の性質へと実体化されたモノとしての「醜」である。わざわざ煩雑になることを恐れずに、醜を「アブジェクション」と「醜」とに分化させたのは、そのことによって醜における主体と対象との関係のありようを記述することが可能になり、醜を関係の次元で検討することが可能になるからである。

「アブジェクション」において重要なのは、それが前対象的な体験であることである。すなわちKristeva(1980/1984)が述べるには、「アブジェクション」において主体は、「境界を消し去った世界の瓦解」を目撃するわけだが、それは日常の我々の意識において自明なものとなっている対置される主体と対象という構造以前の体験である。いまだ、対象が対象として存在する以前の、事態に巻き込まれ、主体と対象という境界が失われた体験である。「アブジェクション」における対象の無さからは、逆に「目を背ける」ということによって「醜」という対象が創造されることが理解される。すなわち、事態に巻き込まれ、対象以前の世界を生きる主体は、「目を背ける」ことによって、事態から離脱して、事態そのものを対象化することになる。事態は対象化されることによって、「醜」として実体化されるのである。ここで、主体は「関与する」ことから「鑑賞する」ことへとそのありようを転ずることになる。それはすなわち、関係の断絶である。実体化された「醜」とは暴力の結果である。心理臨床の実際に戻るのならば、「アブジェクション」とは心理臨床家とクライアントが関係のうちに留まっており、それゆえに互いに境界が侵犯されて、互いが対象として、他者として成立する以前の混然とした関係を生きている状況と言えよう。しかし、それが耐え切れなくなったときに「目を背ける」と心理臨床家にとってクライアントは鑑賞される対象、「醜」として実体化されることになる。美学と心理臨床との相性の悪さの一端とは、この鑑賞と関係との相性の悪さに由来すると考えられる。

以上より、「アブジェクション」と「醜」という二種類に醜を分化させることによって、主体と対象との関係のありようについて明らかになった。ここで、再びBreuer,J.とAnna O.に戻りたい。それは関係が醜のプロセスをたどる経過を再検討することである。

9. 人間を見つめて

醜の実現を検討していく中で、「目を背ける」という心理臨床家の行為の次元に焦点付けられてきたように、本論での心理臨床における醜の実現とは本質的に逆転移論の範疇にある問題である。逆転移論という立場を取るときに、自ずと心理臨床家は自分自身の問題として醜と向き合わざるを得ない。なぜなら、実現された醜がクライアントの存在によるものではなく二人の関係、何より心理臨床家のコミットのありように根ざすものであるからである。この問題を論じるために、再びBreuer,J.とAnna O.の物語に立ち戻ることになる。

心理臨床家とクライアントは面接の場で出会い、そこに互いの語りを集積していく。その語りは虚無に向けて語られるのではなく、眼前の他者に向けて語られるものである。そこに互いの欲望がべったりと張り付くことになる。語りの意味内容が積み重なって物語が紡がれるのと同時に、語りに根付いた欲望は面接関係を固有な色彩へと染め上げていく。そして、面接は欲望が極度に充満する場となり、もはや語られる内容など問題にならないような、関係自体の希求が起

こってくるようになる。この段階に至って、関係はその欲望の充満に耐え切れなくなり決壊し、面接の場で欲望が顕わになる。この顕わになった欲望は関係の境界を危うくさせ、体験の次元ではアブジェクションを実現させる。Breuer, J. は自分の子を宿した Anna O. の姿に何を見たのか。それはなりふり構わずに自らに縋りつく女の欲望であり、同時に実現してしまった自らの欲望の姿であったのではないか。19世紀の医師であった Breuer, J. にとって、患者との関係において自らの無意識的欲望を目の当たりにしたことは、彼が持っていた職業的規範を損なうものであったろう。患者のありようや、患者との関係のありようについての Breuer, J. の「かたち」は、そこに闖入した二人の欲望によって否定される。このとき、Breuer, J. と Anna O. は互いを対象として認知する以前の、混然とした欲望の渦のなかにあったと考えられる。そして、Breuer, J. はイタリアへと向かうことで、そこから「目を背ける」。彼の「見つめ」を断念する行為は、アブジェクションを「醜」として実体化する行為であり、Anna O. との関係を断絶するひそやかな暴力であった。

重要なことは、心理臨床における「醜」の実現とは、心理臨床家とクライアント双方が無意識のうちに協力して作り上げた心的な構成物の結果であるにも関わらず、同時に最終的に心理臨床家の「見つめ」の断念が決定的な役割を果たしているという事実である。面接がアブジェクションの場になるとき、関係を生きる営みとしての心理臨床としては、それが危機的状況であるからこそ、本質的な作業がなされる重要な時期である。なぜなら、それは心理臨床家とクライアントの根源的なありように関わる時期だからである。しかし、心理臨床家が目を背けて「見つめ」を断念するときに、関係の次元にあったアブジェクションは実体化し、クライアントは「醜」として実体化されるようになってしまう。このときに、Breuer, J. が「見つめ」ることができなかったのは、Anna O. の姿であると同時に、自身の欲望の姿であった。

Breuer, J. がそれ以上進むことが出来なかった地点に今本論は立っている。そして、そこからの決定的な一步を拓いたのは勿論 Freud, S. である。Freud, S. は関係を決壊させる欲望を、幼児期の欲望の反復であると理解し、「転移」を「発見」した。それは Breuer, J. が目を背けた地点で、なお Anna O. がいかなる人間であるのかを理解しようと、彼女を「見つめ」ようと踏みとどまる姿勢である。関係において起こることを実体化するのではなく、関係において起こることとして関係に踏みとどまる視点を与えてくれるのが「転移」という理解の重要性である。Freud, S. がそこに踏みとどまった最初の人間であったのは、彼自身が真摯にクライアントだけではなく、自らをも含めた人間の欲望を見つめ続けた人間であったからだと考えられる。

アブジェクションに際して、耐え難い不快感と不安にも関わらず、「目を背ける」のではなく、関係に踏みとどまって、クライアントの姿と自らの欲望を「見つめ」続けることこそが、心理臨床家の倫理であると筆者は考えている。「見つめ」による「かたち」の生成によって、面接関係は変容のプロセスを歩むことが可能になる。このとき、生きた主体のコミットが必要であったように、心理臨床家は生きた主体として面接の場にあり続けなければならない。

10. 醜との心理臨床—暴力の往還

本論では、心理臨床における関係の破綻を醜の実現という視角から論じた。「かたち」が否定され奔流した無秩序な力による耐えがたいアブジェクションと、そこから「目を背ける」行為に

よる実体化された「醜」という二つの契機を検討した。面接においては、心理臨床家とクライアントの双方の欲望が顕わになるときに、心理臨床家はアブジェクションの訪れを実感する。このときに、心理臨床家は「目を背ける」ことなく、関係の場にとどまり、クライアントと自分自身の欲望を見つめ続けることこそが、心理臨床における醜の倫理学であることを論じた。様々な領域について、言及しながら思い切って論を進めたことによって、やや論が飛躍した部分もあったが、このことについて今後の課題として、醜という問題と向き合い続けていきたい。むしろ、心理臨床の過程では、醜という問題と今後も不断に出会い続けていくことになるように思われる。

最後に重要なことは、醜の実現にはその背景に一貫して暴力が流れていることである。すなわち、「かたち」の否定は力学的調和体に加わった異質な力(=暴力)によってなされ、それが無秩序な力の奔流(=暴力)を生み、耐え難い不快感を受けて「目を背ける」というひそやかな暴力を主体は行使する。ここで起こっているのは、暴力の往還である。その帰結が実体化された「醜」という決定的な暴力である。それゆえ、醜を対象の客観的属性とする通俗的な理解とは、主体が目を背けた後に生まれてくる実体化された「醜」という理解のありようである。この意味で、本論が基本的な立場として「醜とは「実体」として存在するのではなく、「体験」として実現される」ことを強調したのは、アブジェクションから目を背けるのではなく、「見つめ」続けるという心理臨床家の倫理的な姿勢において本論を執筆しようと試みたからであった。しかし、それにもかかわらず、醜を論じようと試みることによって、本論もまた暴力の往還へと巻き込まれていった。

グロ画像やハンセン病者についての節で、その身体の変形を例として論じることは、醜を実体化せざるを得なかったように、関係において体験される醜を言語で論じることは極めて難しく、実体化した「醜」を手がかりにしてしか、醜のプロセスとは論じられ得ない。それゆえ、本論の記述自体に根深く暴力性が埋め込まれる結果となった。しかしそれもまた、醜の本性によるものでもある。醜とは絶えず実体化し、暴力を引き起こそうとする運動をその本性において含んだ現象なのである。このことから、本論で論じた醜の倫理学とはきわめて困難な試みであることが理解されるだろう。

しかしこのような「目を背ける」ことを律する本論の姿勢を超えて、「醜」とは面接関係でひそやかに実現されるものではないか。それは心理臨床家の倫理的なありようを超えて、心理臨床家の持つ人間としての限界が必ず存在するからである。限界を持つ人間としての心理臨床家は、関係からときに目を背けることになる。そのような限界は、暴力として機能すると同時に、欲望とは無制限に充足されるのではなく、制限のある現実の中で生きていく事実を教えてくれるものである。このような「醜」と心理臨床家の限界の肯定的な側面については、今後の課題としたい。

本論が暴力の往還に巻き込まれ、醜のプロセスを実体化する動きに手を貸しながらも、醜の倫理学を論じようとしたことは、そこに矛盾を抱えざるを得ないゆえに、本論が醜との関係を生き抜こうとしたことの現れである。本論は、筆者自身と切り離された主題としての醜を論じようとする行為ではなく、醜との耐え難い関係を筆者が生きようとする行為であった。そして、醜とはそのようにしてしか論じられえない主題である。以上より明らかであるように、本論が美学ではなく、心理臨床学の論文であるという本質的な根拠は、心理臨床における醜を主題としているという本論の内容ではなく、論文を書くという筆者の行為が、醜との関係を生きようとする行為であったことにある。その意味で、本論を執筆するときの筆者の姿勢は、面接で醜を生き抜こうと

する心理臨床家としての姿勢である。ときに目を背けて醜を実体化し、関係が破れながらも、それでも醜を「見つめ」ようとした試みである本論は、本質的に「醜との心理臨床」であった。

〈謝辞〉

ご指導いただいた本学皆藤章教授に感謝いたします。また、本研究は、文部科学省グローバルCOEプログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」の支援を受けた。

参考文献

- 蘭由岐子(2004)：「病いの経験」を聞き取る－ハンセン病者のライフヒストリー，皓星社。
- Freud, S. (1930)：Das Unbehagen der Kultur, (浜川祥枝訳, 1969, 文化への不満, フロイト著作集第三卷, 人文書院, pp.431-496.)
- Freud, S. / Breuer, J. (1895)：Studien uber Hysterie, (金関猛訳, 2004, ヒステリー研究(上)(下), ちくま学芸文庫.)
- Hagman, G. (2005)：Aesthetic experience－Beauty, Creativity, and the Search for the ideal, Amsterdam.
- Herman, J. L. (1992)：Trauma and Recovery, (中井久夫訳, 1997, 心的外傷と回復, みすず書房.)
- Jones, E. (1957)：The Life and Work of Sigmund Freud, (竹友安彦・藤井治彦訳, 1969, フロイトの生涯, 紀伊國屋書店.)
- 片口安史(1987)：改訂 新・心理診断法, 金子書房。
- 河合隼雄(1991)：イメージの心理学, 青土社。
- 木村敏(1992)：生命のかたち/かたちの生命, 青土社。
- 小島義郎・岸暁・益田秀夫・高野嘉明編(2007)：英語語義語源辞典, 三省堂。
- Kristeva, J. (1980)：Pouvoirs de L'horreur, (枝川昌雄訳, 1984, 恐怖の権力－＜アブジェクション＞試論, 法政大学出版局.)
- 中村雄二郎(1991)：かたちのオディッセイ, 岩波書店。
- 丹生谷哲一(2001)：中世の非人と「癩」差別, (沖浦和光・徳永進編, 2001, ハンセン病－排除・隔離・差別の歴史 pp.75-91, 岩波書店.)
- Ogden, T. H. (1997)：Reverie and Interpretation: Sensing Something Human, (大矢泰士訳, 2006, もの思いと解釈－人間的な何かを感じ取ること, 岩崎学術出版社.)
- Rosenkranz, K. (1853)：Asthetik des Haslichen, (鈴木芳子訳, 2007, 醜の美学, 未知谷.)
- 佐野陽子(1994)：醜からの逸脱－エマニュエル・レヴィナスにおける否定性の問題, 成城美学美術史, Vol.1, pp.27-70.
- Schachtel, E. (1966)：Experimental Foundations of Rorschach's Test, (空井健三・上芝功博訳, 1975, ロールシャッハ・テストの体験的基礎, みすず書房.)
- 白川静(1999)：字訓, 平凡社。

東畑：醜との心理臨床

高橋巖(1971)：「醜」，(竹内敏雄編修，1971，美学事典 - 増補版，弘文堂，pp209-210.)

滝澤武人(2001)：イエスとハンセン病，(沖浦和光・徳永進編，2001，ハンセン病－排除・隔離・差別の歴史，pp.113-129. 岩波書店.)

鷺田清一(2005)：ちぐはぐな身体，筑摩書房.

Whyte, L. (1951)：Aspect of Form, (齊藤栄一訳，1985，形の全自然学，工作舎.)

(臨床心理実践学講座 博士後期課程 2 回生)

(受稿2008年9月8日、改稿2008年12月17日、受理2008年12月18日)

Psychotherapy for Ugliness

TOWHATA Kaito

This study examined the collapse of the relationship between therapists and clients, specifically focusing on the experience of ugliness. Using the example of a burned baby and grotesque pictures obtained online, the experience of ugliness is discussed. To discuss how people behave in response to ugliness, the history of a leprosy patient is examined. Ugliness is caused by damaged "form," which is the mechanical constitution, and when people avert their gaze, the ugliness becomes substantial. Therefore, ethically, the psychotherapist should not avert his or her gaze. Last, it becomes clear that this paper, which discusses about ugliness, means that the psychotherapy for ugliness because the attitude of the author to write this paper is the same as the attitude of the psychotherapist for ugliness.